

建築家 村山 雄一

囲み方で違う心理的な効果

畳の角は直角である。

畳の割り付けから成り立った日本の住宅は、部屋のどの角を取っても直角である。畳の生活は私たち日本人に、部屋は四角いものであると思ひ込ませるに至ったのだろうか。日本人ほど四角でない部屋に対して戸惑いを感じる民族はいないだろう。私は四角四面で少し窮屈になってしまった日本の住宅の中で、体を少し揺すってみたくと思う。できればそれが優雅な舞になることを願う。

空間に動きを

①

も手に取るように分かる便利さがある。ただ残念なのはその部屋の角が直角に限られているということだ。

らぎを覚えるように、鋭角は冷たさを、鈍角は温かさを、そして直角はとどまった安定感を空間に生じさせる、というのが

しのげる生活空間を「家」として造り出す時、壁の織り成す角度や天井の傾き具合が、それぞれの性格を持った角度としてそ

に囲むか、四角に囲むか、あるいは丸く囲むか、その囲み方は無限である。設計者自身が部屋の内に立って、壁をどう展開し

部空間に演出することも可能だ。また、方位や太陽の動きに対して壁面をどう向けていくのかも、外からの要求として考慮しなければならぬ。こうした内と外の要求から部屋の形が決まってくる時、家の構造は畳割りから生まれた旧来の日本の民家のそれとはおのずと違ってくる。

畳にとらわれぬ壁展開

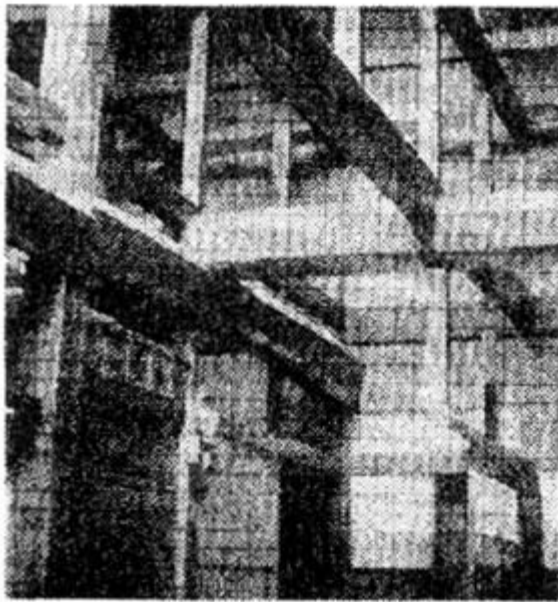
角度には性格がある。鋭い刃物に冷たさを感じ、心まろやかな人には温かさを、そして光に向かって大地から真っすぐに伸びた大樹の姿には安

私の角度のとらえ方である。人が壁を張り巡らすことで膚りから独立した自分だけの場所を確保し、天井を覆うことで雨露を

の生活空間に反映して、壁には間仕切りとしての役目だけでなく、囲むという意味がある。三角

ていくかを考えねばならない。部屋に足を踏み入れた時、壁面がどう見えるか、それが一面の壁なのか二

面の壁なのかでは心理的に効果が違ってくる。壁を少し膨らませてゆったりとした感じを出したり、直角の角を作った感じをその内



畳の割り付けに符合した束柱



もっと自由な発想で(村山さん設計)

面のかでは心理的に効果が違ってくる。壁を少し膨らませてゆったりとした感じを出したり、直角の角を作った感じをその内

村山 雄一(むらやま・たけかず) 1945年生まれ。早稲田大学第一理工学部建築学科卒。77年、ハウザー財団の奨学生として渡独、その後欧州を中心に建築デザイナーとして活躍。現在、一級建築士事務所「村山建築設計事務所」(横浜市神奈川区) 主宰。